

## ああ蒔田栄一先生よ

伊 部 政 一

蒔田栄一先生はわが城西大学にとって極めて大切な学者であった。その先生の訃報に接した時、私は「まさか……」と思ったが、続いて「天はかくも非情なものなのか」と、恨みと嘆きの気持で一杯になった。

ああ、蒔田先生よ、なぜ先生は私を、いや私達を残して、先に去って行かれたのですか。それが先生の寿命の限界だったのでしょうか。

思い出す毎に先生のあの特異の姿が目映ずる。私は先生の容姿に接する度に晴やかな気持になったものだ。顔さえ見れば心温まる思いがしたものだ。それは何故であるか。以下、思い出すままに綴ってみよう。

何といっても先生は多趣味多芸の人であった。書道は正に達人で、左手に色紙を持ったまま、右手の筆でスラスラと達筆を振る姿は印象深い。先生の前で字を書くのはとても嫌であった。学生時代に先生は私の岳父、丹羽海鶴から書を習ったことがあるので、その点、深い因縁もある。

短歌も堂に入ったもので、万葉の頃から今日に至る名歌の何百首かを暗記されていたのだから恐れ入った。未亡人となられた迪子夫人も短歌に秀でられ、愚妻も迪子夫人の肝入りで原始林社に入門し、今も教えを受けている。

先生はまた小唄の名取りでもあった。酒席などで興に入るや、いつとはなしに小唄が出てくる。その上、民謡、流行歌、軍歌なども大好きで、私のごとき武骨者は軍歌や流行歌などで先生と共に蛮声をはり上げたものである。その外にもまだあるが、専門の学問に精進する傍ら、よくもまあ、これだけのことが出来たものかと、その絶倫の能力に敬服する。

飲む方も酒豪であった。先生とは二十数年来の飲み友達でもあり、新宿界限を中心にあちこち飲み歩いた往年のこととは忘れえない。元気の頃は毎朝起床と共にオチヨコに二、三杯のウイスキーを飲み乾しておられたそうだ。そんなことも先生の健康に影響を与えた点があると思っている。

先生はまた中々の見栄坊で、しかもデラックスな生活を楽しんだ人であった。国内旅行でもグリーン車のある場合は必ずグリーン車に乗った。海外旅行では最高級ホテルの最高級室に陣取り、そこで来客の場合も最高級料理をもつて遇した。病気の時には日本一の医者にかかることにしていると言われ、私の病気の際にも私や家内に日本一の医者に見て貰えと屢々忠告されたものである。その日本一の医者の治療のもとに他界されたのであるから、先生自身として或いは心残りがなかったことかとも思う。

更にまた先生は直情径行、情熱の人でもあった。そして好き嫌いの激しい人であった。いやな奴だと思ひ込んだら、良い点があるうとなかろうと、近寄ることをしなかった。人の面倒をよく見る人情家であったから、色々な学校へ先生の紹介で就任された方も多いが、後になって先生の逆鱗に触れ、去って行った人もある。先生は正義から外れた行為に対しては鋭く批判をした。

先生の母校は現在の東京外国語大学であり、先生は私の数年先の先輩である。しかし英語学の方は私の専門外であるから、先生の専門的な蘊蓄について私にはかれこれ語る資格がない。けれども私の長男が少年時代に蒔田先生から個人的に教えを受けており、語学が専門ではないが、英語で演説もできるようになり、先生による賜だと高く評価し

ている。思えば家庭的にも長い交りであった。

外語大では同学出身の異色の教授として、更に一層の活躍を期待していた。先生としても大いに張りきって城西大学の発展のために一生を送るのだと言われていた。残念の至りであるが、幽明境を異にされたのである。とまれ先生の生涯は美しい人生であった。

ここに改めて蒔田栄一先生の御冥福を祈ると共に、私事を交えて恐縮ながら、この拙ない文を捧げる次第である。